滋賀県立大学
THE UNIVERSITY OF SHIGA PREFECTURE

県大の星
SHIGA
USP ★ STARS

半月舎
御子柴 泰子 Mikoshiba Yasuko

一般財団法人日本気象協会
小山 和香 Oyama Waka

2024 FEBRUARY
10
地守人

卒業生の今

USP ★ STARS | 10 | 2024 FEBRUARY

滋賀県立大学　OBOG Magazine
県大の星　第 10 号

発行月 | 2024 年 2 月
発　行 | 滋賀県立大学　経営企画課
〒522-8533 滋賀県彦根市八坂町 2500
Tel.0749-28-8200　Fax.0749-28-8470

県大の星 地守人

キャンパスは琵琶湖。
テキストは人間。

このモットーを胸に
社会で活躍する卒業生の原点に迫るインタビュー

文化を、自然を、守り続ける行動力

今回お話を聞いたお二人は、
大学生の頃に培った遂行力を源に、
彦根で唯一の古本屋「半月舎」を経営し
古本文化の拡大と発展に勤しむ御子柴 泰子さんと、
在学時代のフィールドワーク経験を武器に、
環境アセスメントを通して
全国各地の環境保全に取り組む小山 和香さんです。
職種や拠点は異なるお二人ですが、
それぞれの場所で、その地域を想って、
日々ひたむきに仕事と向き合う姿勢は同じ。
お二人の想いが、
今日も人々の大切な地域を守り続けています。
学生時代の楽しい思い出を振り返りながら、
お二人が見据える将来のことについて語っていただきました。

- CASE -
01
地守人

Mikoshiba Yasuko
御子柴 泰子
半月舎

古本屋経営のきっかけは
大学時代の経験
彦根唯一の古本屋を身近な場所に

※2008年の環境科学部、人間文化学部の学科再編に伴い、人間関係学科等が設置された。

歴史ある街・彦根で幅広い学びに触れた学生時代

高校生の頃から、歴史や風情のある街並みに憧れを持っていました。長野県出身ですが大学選びで魅力を感じていたのは関西圏。京都や奈良など、関西は歴史的な街並みが多いイメージがあったからです。当時は社会科の先生に憧れていたこともあり、教員免許を取れることと、彦根の歴史ある街並みに惹かれ、滋賀県立大学に入学しました。私は人間文化学部生活文化学科人間関係専攻※(現:人間文化学部人間関係学科)で、主に教育学・社会学・心理学を勉強しました。人間文化学部には食、デザイン、地域に関する専攻もあり、幅広い学びが得られました。学部は違いましたが環境・建築デザイン専攻(現:環境建築デザイン学科)にも友人がいたので、面白いと評判の授業も受講していました。昔からもったいない精神があり、せっかく授業を受けられるチャンスがあるのだからという思いで多くの授業を受講し、いろいろな分野を広く学ぶことができたことは、現在の古本の仕事で多くの人と接する中でとても役立っていると思います。

研究では、人間行動学を専門とする先生にお世話になりました。私は、主にコミュニケーションについて研究しており、テーマは「発話と体の動きの関係について」。人が話すときにどのような動きをしているのかということを分析していました。少しマニアックな研究ですが、ジェスチャーや目線などの体の動きと、発話との関係を探るのはとても面白かったです。

「近江楽座」での経験を通して学んだプロジェクト運営のノウハウ

大学生活で特に注力していたのは、サークル活動です。私が所属していた木工サークル(エコキャンパスプロジェクト木楽部会)では、椅子などのものづくりをしたり、古い家の改修も経験しました。街の人に「公園にベンチを作ってほしい」と頼まれたり、文化祭では子供たちと椅子を作るワークショップを開催するなど、学外の人たちと交流する機会も多かったです。

木工サークルには生活デザイン専攻(現:生活デザイン学科)や環境・建築デザイン専攻所属の人が多く、私が学んでいたこととは全く違う分野を学んでいた人が大半でしたが、一緒に活動できたことは貴重な経験でした。

木工サークルは、大学による学生の活動支援プログラム「近江楽座」の中のプロジェクトです。「近江楽座」とは、地域社会へ根付いていくプロジェクトを学生が考え、プレゼンテーションを経て採択されたプロジェクトが助成金をもらえるという仕組みです。選ばれると、年間の活動計画を立て、1年の最後には活動内容の報告を行います。

木工サークルは人数の多いサークルだったのですが、私の学年は偶然にも私一人だけ。その結果、私が代表としてプレゼンテーションをしたり、活動計画を立てたりと「近江楽座」を通して様々な機会に恵まれました。やるべきことが多く、大変な時もありましたが、学部の卒業間際まで精力的に活動していましたね。

当時の経験は、卒業後の今でも非常に活きていると感じます。計画的に活動を進めることはもちろん、社会で役立つ実技も習得することができました。学部の情報室のパソコンにデザインソフトが入っていて、自由に使えたので、サークル用のチラシなども作れるようになりました。そうした経験は現在、イベントの企画などをする際にとても役立っています。

教員免許のための授業もありましたし、木工サークルの代表をやりながら他学部の授業も受けていたので、周りから見ればとても忙しい学生だったと思いますが、非常に充実していました。

大学院生時代に触れた彦根の歴史と古本屋経営のきっかけ

学部生時代はサークル活動に注力していたこともあり、もう少し学びを深めたいという思いから大学院に進学しました。

私の周りで大学院に進む人は多くはなかったですが、逆に人数が少ないことで学生同士や教授との距離は近かったように思います。少人数で受けるゼミ形式の授業が多く、学部生の時よりも一つひとつの授業の密度が濃い印象がありました。

研究内容は基本的には学部生の時と同じ内容だったのですが、同時に彦根の近代史への興味がわいてきたのもこの頃です。もともと歴史的な街並みが好きだったこともありますが、澁谷博さんとの出会いが大きなきっかけとなりました。

澁谷さんは彦根の街が変わっていく過程を昭和30〜40年代にかけて写真に撮っていた方で、大学の先生の紹介で知りました。お話を伺いに行くと、ご自身が撮った写真を見せながら、彦根の街がどのように変わっていったのか、例えば彦根は今でこそ道幅が広いのですが、もともとは城下町なのでとても狭かったということなどを熱心に教えてくれました。その内容がとても面白かったので、何度もお話を伺いにご自宅に通っていました。

そのように彦根の歴史を調べていたときに気づいたことが、街に古本屋がないということです。調べ物をする際、主に利用していたのは図書館や市役所でした。私は澁谷さんを訪ねて話を聞くこともできましたが、多くの人にとって、もっと気軽に訪ねられて、その場の人に話を聞ける場所があれば良いのにと思っていたとき、古本屋という場所が浮かびました。

また、街を探索する中で、古い本が捨てられている現場に出くわすことが度々あり、もったいないと思うこともありました。「この街に古本屋があったら良いのに」と知人に話したところ、「自分でやればいい」と言われ、それもそうかと思い、就職と同時に副業という形で友人と一緒にスタートしました。その友人も滋賀県立大学の卒業生で、もともとは近江楽座での活動を通して知り合ったので、滋賀県立大学での縁というものを強く感じています。

古本屋経営の魅力は本を通じた人とのつながり

古本屋の仕事は、基本的にお店のある彦根界隈で本を引き取り、店舗や遠方での催事で販売しています。古本やものが捨てられずにふたたび活用されていること、それに携わることで生活できていることを嬉しく思います。一度は不要になったものをもう一度役立てられるようにできる仕事なので、とてもやりがいを感じていますね。

一番好きな仕事は買取です。お店に持ってきてくださる方もいますし、ご自宅や会社、学校へ行って査定をすることもあります。商業は仕入れる人と売る人が分かれていると思いますが、その両方をやれることが今の仕事の魅力です。

買取では、本から持ち主の人となりが見えてくることがあり、そういった本を通したお客さんとのコミュニケーションもとても楽しいですね。

好奇心を後押ししてくれる学風が滋賀県立大学の魅力

滋賀県立大学はそれほど大きな大学ではありませんが、バラエティに富んだ学部・学科があることが魅力だと思います。自然豊かなこともあり、のどかな環境で学生がそれぞれ興味のあることに熱中しています。みんなが自分のやりたいことを頑張っていたからこそ、自分も好きなことに没頭できましたし、全く違うことを目標にやっている人とも仲良くなることができて、世界が広がりました。そのことが今の古本屋経営にもつながっているので、自分の好奇心のままにやりたいことを頑張れる学風というのはとても

御子柴さんにまつわる あれこれ AREKORE

ひと箱古本市

イベント運営にも精力的に取り組んできました。その中の一つが、街の人が売りたい本をひと箱持ってきて売ることができるという本のフリーマーケット・ひと箱古本市です。

古本屋なのに実は…？

実は昔からそこまで熱心に古本巡りをしてきたというわけではなく、誰もが気軽に立ち寄れる、そんな場所を作りたいという思いが古本屋経営につながりました。

「半月舎」開店秘話

「半月舎」という店名には、二人で店を始めたので「半分」という意味と、月に半分はお店を開けられたらいいなという思いを込めました。

- CASE -

02

地守人

Oyama Waka

小山 和香

一般財団法人
日本気象協会

自然と触れ合い、対峙した学生時代
積み重ねた経験を武器に
全国各地の調査へ踏み出す

魅力的だと思います。

「近江楽座」での活動も、唯一無二の経験になりました。最初は軽い気持ちで参加した「近江楽座」ですが、結果的に学生時代に一番熱中した活動となりました。私の在学中は約20団体が活動しており、それぞれの活動内容をプレゼンテーションを通して知ることができたので、とても刺激になっていました。そういった場を大学側が作ってくれたというのはありがたいことですし、今思うと本当に貴重な経験でした。

歴史ある街・彦根で
古本屋をより身近な場所に

古本屋の仕事に終わりはないので、引き続き仕事を充実させていきたいです。彦根では「古本」「中古」ということへのなじみがあまりないように思います。古本についても、買ったことのない人が多いでしょうし、古いものをもう一回活かそうという意識もあまりないのではないでしょうか。古本屋がなじみのある場所になっていくと、街の魅力がさらに増すはずなので、彦根のみなさんにとって、より身近なものになるようにしていけたらと思っています。

また、来年から、もともとは銭湯として使用されていた建物を改修し、古本とレコードの専門店をオープンする予定です。男湯から入るとレコード屋、女湯から入ると古本市が楽しめる仕組みになっています。

夫が中古レコードに関連する仕事をしており、一緒にお店を始めることにはもともと興味を持っていました。しかし、レコードを古本屋に併設すると、お客様はどうしても本よりもレコードに興味を持つことが多く、どうしたものかと考えていた時にひらめいたのがこの銭湯を使ったアイデアです。銭湯は番台が真ん中にあるので、一人で両方を見ることができますし、古本とレコードで空間が分かれていると、お客さんもそれぞれ自分が見たい商品に集中できるので、これは名案だと思いました。

この夏に現地で古本レコード市を開催する機会があったのですが、実際にやってみるととても反応が良かったので、本格的に店舗の運営に向けて動いていきたいと思っています。実現すれば、今よりもずっと広い店舗になりますし、建物自体もそのままにしておくのはもったいないくらい歴史のある建物です。明治時代に作られた由緒ある建物なので、大事に使って彦根の名所の一つにしていきたいです。

楽しむ気持ちを忘れなければ
道は拓ける

学生のみなさんには、「今を存分に楽しんでください」と伝えたいです。

目標を立てて達成することはもちろん良いことですが、心の赴くままに自分の興味があることや好きなことに向き合うのも、また素敵なことです。楽しんでやっていれば、いろいろな人たちが仲間になってくれますし、自分の向いていることが何かという点も分かってくるはずです。

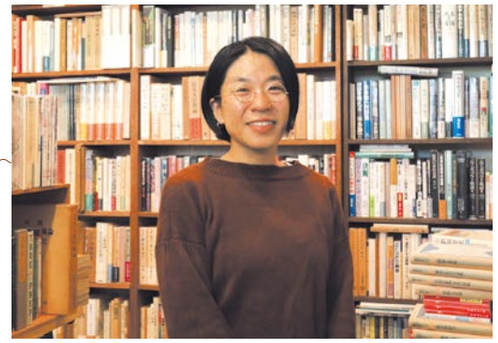
学生時代は、時間があるのが一番素晴らしいことだと思うので、とことん好きなことを楽しんでください！

御子柴 泰子 みこしば・やすこ

[人間文化学部 生活文化学科 人間関係専攻※ 2008年度卒業
大学院人間文化学研究科 生活文化学専攻 2010年度修了]

卒業後、ひこね市文化プラザに就職。企画広報室に所属し、多くの自主事業企画の運営を行う。副業として2011年に古本とデザインのお店「半月舎」をオープン。2014年にはひこね市文化プラザを退職し、個人事業主として独立した。その仕事は古本の販売にとどまらず、前職の経験を活かしイベント事業なども精力的に行っている。

※2008年の環境科学部、人間文化学部の学科再編に伴い、人間関係学科等が設置された。



緑豊かなキャンパスで大好きな自然科学に熱中できた

小さい頃から、身の回りの自然現象に興味津々な子どもでした。特に天気が好きで、「なんで雲はいろいろな形になって空に浮かんでいるんだろう?」と上を見ながら歩いていて電柱にぶつかってしまったこともあるほどです。高校で理系のクラスに進学したことがきっかけで、さらに理系科目にのめりこむようになりました。小さい頃に疑問に思っていたことが、化学式や数式で示せることを面白く感じ、大学でも理系の道に進むことを考えるようになりました。

大学探しで重視した点は、京都の自宅から通えて、かつ自然科学を学べる大学ということです。いろいろな大学を検討しましたが、滋賀県立大学を受験した決め手は、なんといっても自然豊かなキャンパスです。高校生の頃まで市街で過ごしていた私にとって、のどかな環境はとても新鮮でした。また、その豊かな環境の中でフィールドワークを積極的に行える点も魅力的に感じ、環境科学部環境生態学科に進みました。

1・2年次の頃は、学科の垣根を超えた授業が多かったことが印象的です。普段、自分の学科では学ばないような内容を学べる良い機会でした。他学科の学生とグループを組んでフィールドワークを行うプログラムもありました。例えば琵琶湖の水草を調査する授業では、胴長靴を履いて腰まで湖に入り水草を採取するなど、体験したことのない授業でとても楽しかったことを覚えています。このように、入学してすぐの頃から様々なフィールドワークに参加し、早くから実地調査の経験を積めるというのはとても恵まれた環境でした。

化学に没頭した研究室時代 実験を通して培った学生同士の絆

3年次からは研究室に配属され、ますます研究に励むようになりました。様々な研究分野がある中で、私は一番興味があった化学を扱う水圏化学、分析化学分野の研究室に所属し、重金属の水質分析の研究を行っていました。大学院にも進学し、学部生の時よりもさらに深く研究と向き合うようになりました。学会に参加するなど、学部生の時にはなかなか体験できない機会にも恵まれ、より突き詰めた研究ができました。

研究室時代は、他の研究室との交流が盛んだったことが印象的です。例えば、隣の研究室の学生はプランクトンの研究を行っており、一緒になって観察したことは良い思い出です。

複数の研究室の学生たちが、一つの研究室に集まる形だったので、調査の時にも、他の研究室の学生たちと助け合うことが頻繁にありました。例えば、研究に使用する大量のサンプル採取や処理を手伝うなど、一人では難しいことをお互いに助け合っていました。私自身、1日がかりで分析機器を使った実験をする日には、友人達に助けてもらいながら一緒に研究室に籠ったこともありました。研究室はいつも和気あいあいとした雰囲気で、楽しい研究生活を送ることができました。

教授がつないでくれた縁 現在の仕事との出会い

就職活動を始めた頃は、大学で水質分析の研究をしていたこともあり、製薬会社など分析技術を活かせる職種を考えていました。しかし、現在勤めている会社を教授が紹介してくださったことをきっかけに、気象、環境系の仕事に興味を持つようになりました。紹介いただいた会社について調べていくと、毎日何気なく目にしている天気予報をはじめ、日々の生活から様々な産業まで影響を及ぼすような気象情報を扱う仕事に携われることが分かりました。また、前述したように、化学が好きでとにかく理系の職業に就きたいと考えていたことも一つの決め手となり、現在の会社に入社しました。

総合職のためどの部署にも配属される可能性はありましたが、どれも「気象」に関わる仕事という点で魅力的に感じていました。仕事内容に加えて、入社前に惹かれた点は人の温かさです。初めて今の職場を訪問した際、とてもアットホームな様子が印象に残りました。やはり働く人たち同士の雰囲気が良い会社に行きたいと思っていたので、自分のやりたいことに加えて、和やかな職場で働けるという点は、入社前の私にとってとても魅力的でした。

実際に入社した後もその時の印象は変わらず、周りの方はとても優しく接してくれました。1年目は関西支社に配属されたのですが、先輩方がとてもフランクに接してくださったおかげで、直ぐに職場になじむことができました。

専門的な視点を持ちながらも人とのコミュニケーションを大切に

入社してから5年間は関西支社に配属され、主に火力発電事業の環境影響評価(環境アセスメント)に係る気象観測業務や大気汚染物質の拡散予測業務などを行っていました。その後東京の本社へ異動となってから現在まで、主に陸上の風力発電事業の環境アセスメント業務を担当しています。

環境アセスメントとは、電力事業者が大規模な開発事業を実施するにあたって、工事や設置が環境にどのような影響を及ぼすかをあらかじめ調査、予測・評価を行うことで、あらゆる観点から環境の保全への配慮を行い、「より良い事業計画となるよう」検討していくための制度です。また、環境への影響だけではなく風況、事業採算性、地域の方々とのコミュニケーション等、多面的に検討したうえで事業計画を具体化していきます。

具体的な仕事内容としては、現地で動植物など様々な自然環境項目の調査を行い、事業による環境への影響を予測、評価します。その結果を「環境影響評価書」とよばれる書類として取りまとめます。

環境アセスメント手続きの過程では、事業を行う事業者だけではなく、行政や事業を行う地域住民の方々への環境アセスメントのご説明なども行っています。専門的な知識や技術はもちろん必要ですが、コミュニケーション能力も問われる仕事です。

長い道のりも、一つひとつが仕事のやりがいにつながる

毎回スムーズに手続きを進められるわけではなく、将来起こり得る問題を初期段階から見据え、問題を一つひとつ解決していく必要があります。その過程でコンサルタントとして、事業者の方から相談を受けたり、問題解決に向けていろいろな案を出し合ったりしながら対応していく必要があります。

環境アセスメント手続きは、完了するまでに早くても4年程度はかかります。そのため、事業によっては様々な理由で中断や延期となることもあります。入社してから一つの案件を最後まで担当したことはまだありませんが、それほど長い期間をかける手続きをいかにスムーズに進めるかという点を日々大事にしています。

一番やりがいを感じるのは、手続きが完了した瞬間です。とても長い道のりですが、一つひとつを着実に進めていき、問題解決ができたときは安心と同時に大きな達成感を感じます。

仕事では、現地に行くことが多いので出張が多く、飛行機や新幹線で日本の北から南まで頻繁に移動しています。業務の合間にその地域の美味しいものを食べるのも、楽しみの一つです。

大学でのフィールドワークの経験が卒業後の自身の強みに

在学時代の経験で、特に今の仕事で役立っていることはフィールドワークです。授業で実施する環境フィールドワークや他の研究室の手伝いなど、学外に出る機会は非常に多くありました。さらに研究では、月に1度は大学の実習調査船「はっさか」で琵琶湖に出て採水等の水質調査を実施していました。このような大学時代の実践的な経験が、現在の現地調査業務に取り組む基盤となっていると感じています。

環境アセスメントは事業の計画が立案された時点から計画地に赴き、実際に山に登って現地の状況を把握したり、周辺の調査地点を探したりします。急に現場へ向かうこともあるようなアクティブな仕事です。また、現場は風の強い山の尾根上であることが多く、車で

小山さんにまつわる あれこれ AREKORE

► 休日のお出かけ先

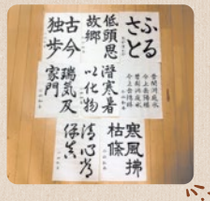
趣味は美術館や博物館巡りで、頻繁に展覧会を訪れます。また、お休みの日は話題のスイーツ巡りをすることも。

► 大好きな海外旅行

コロナ前はリフレッシュがてら毎年海外旅行に行っており、18カ国制覇しました!

► 特技の習字

小さい頃から習っていたのが習字。今は家族が開いている書道教室を手伝っています。



行けるようなアクセスが容易な場所ばかりではありません。そういった現場に行く際は、大学時代に山に登ったり川や湖に入ったりと、様々なフィールドに出た経験が活かされていると感じます。在学時代に自然と触れ合った経験のおかげで、場所やタイミングに抵抗を感じることなく、全国の調査に乗り出せています。

滋賀県立大学だからこそ築けた自然を通じた人とのつながり

滋賀県立大学の一番の魅力はアットホームな環境だと思います。公立大学であるため、講義のクラスや研究室ごとの所属が少人数であり、生徒同士や教授との距離がとても近いです。他の学科や研究室の教授と関わる機会も多く、研究を進める上でも就職活動にしても相談できる相手が多いのは、とても良い環境だと感じていました。私自身、今の仕事に就いたのは教授の紹介があったからなので、滋賀県立大学での人との縁にとても感謝しています。

また、授業や研究以外の空き時間には友人と近くの川で釣りをしたり、スポーツをしたり、体を動かしてリフレッシュしていました。教授が参加してくれることもあり、とても楽しかったです。学部生のときに学科のみんなで、琵琶湖を自転車で一周したこともあります。自然を通じて、学生同士や教授との仲が深まっていったように感じます。

「好き」の気持ちを大切に さらなる高みを目指していきたい

世界的な問題である気候変動への対策として国内の再生可能エネルギーの普及が進んでいますが、国内の風力発電も陸上だけではなく洋上まで拡大しています。技術の進歩とともに風力発電業界も変化しており、今後もコンサルタントとして専門的な立場で環境アセスメント手続きの助勢や提案ができるよう、知識や経験を日々アップデートして活躍の幅を広げていきたいです。

最新の事例や研究内容から知識や情報のアップデートをするとともに、これまでの業務で培った経験も踏まえて新しい技術や情報にも対応できるようなエキスパートを目指しています。

また、私が勤める日本気象協会の業務は環境アセスメントだけではなく、天気予報、防災、メディア発信など多岐にわたっており、幅広い活躍の場があります。いずれの業務においても「天気が好き」である気持ちを軸に積極的に関わっていきたいと思っています。

広い視野を持ち 何事にもチャレンジ精神で

大学生の頃から将来就きたい職業や具体的な目標を持っている人は多くはないはずです。就職活動を始めた時点で悩むこともあるかと思いますが、小さい頃から好きなことや、学生生活を過ごす中で新たに興味を持ったことを整理して、先生方や友人等に相談しながら将来設計をしてみてください。

私自身、学生時代から将来の明確なビジョンを持っていたわけではありません。大学時代の経験があったからこそ、自分の興味のある分野の仕事に就くことができ、今も続けられていると実感しています。日々の授業もそれ以外の活動も大学時代に築く人脈も、すべてが必ず将来の糧となります。道は一つではありませんし、自分で選択する機会が多くなる大学生活の中で、いろいろなことにチャレンジして素敵な県大生活を過ごしてください。

小山 和香 おやま・わか

[環境科学部 環境生態学科 2012年度卒業
大学院環境科学研究科 環境動態学専攻 2014年度修了]

卒業後、一般財団法人日本気象協会に入社。関西支社 環境・エネルギー事業課に配属され、主に火力発電事業の環境影響評価（環境アセスメント）に係る業務を行う。2019年には本社へ異動し、主に陸上の風力発電事業の環境アセスメント業務を担当。多面的な観点から事業による環境への影響を調査、予測、評価を行い、環境に配慮された事業となるようコンサルティングを行っている。

県大時代の思い出アーカイブ

＼ 大学時代の思い出の数々をお伺いしました ／

御子柴 泰子さんの思い出

cococu ーおうみの暮らしかたろぐー

『cococu-おうみの暮らしかたろぐ-』は滋賀の暮らしの魅力を伝える雑誌です。大学院生の時、デザイン学科の研究室が企画して始まったもので、私もその立ち上げに参加しました。5冊目まで制作に携わり、おすすめの本の紹介などをしています。

自転車

県立大生の移動手段といえば自転車。私自身も自転車通学をしていたので、放課後はかなり遠くまで散策しに行くこともありました。自転車で琵琶湖を一周したこともあります！

木工作業所もくれん

主にこの作業所で木工サークルの活動をしていました。作業以外にも、2階がロフトのような空間になっていたのでそこでミーティングなどをしていました。まさに思い出の場所です。

小山 和香さんの思い出

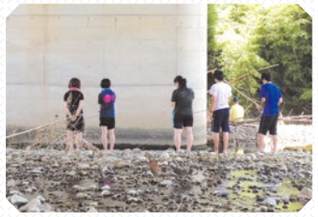
ママチャリでびわ湖一周

学部生の頃、学科の友人達と1泊2日で琵琶湖を一周しました。驚いたのは、場所ごとに琵琶湖の風景は全く違って見えるということ。ゴール直前でタイヤがパンクするというハプニングもありましたが、友人達との忘れられない思い出になりました。

研究のための採水

月1回は大学の実習調査船「はっさか」で琵琶湖に出て採水と観測を行っていました。特に冬はとても寒かったですが、研究室の仲間や先生と協力しながら行う船での作業が大好きでした。

※写真は 2021 年に更新された実習調査船「はっさかII」



水圏研究室の仲間たち

他の学生の研究を手伝うこともあり、研究室全体でチームのような関係でした。「環境」と一言でいっても空気中から水中、そこに住む生き物まで、様々な事象が絡み合って成り立っているものなので、研究室の仲間たちのおかげで多面的に見る力がついたと思います。